

## 論文

# 創造的音楽活動の教材に関する一考察 —紙芝居の効果音—

櫻井琴音

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成24年1月10日受理)

## Consideration on the teaching material of creative musical activity — Sound effect used in picture-story show —

Kotone SAKURAI

(Department of Children's Studies, Faculty of Children's Studies, Nishikyusyu University)

(Accepted January 10, 2012)

### Abstract

Most students have distinguished themselves in singing, playing musical instruments, and listening to music and the sounds of daily life, while picturing the sound of different activities. However, originally these activities are closely connected. Therefore, it is important that the teachers have an understanding of these elements when they teach music in nursery school, kindergarten and elementary school. In this study, I have tried to develop teaching materials that are easily understood by all students.

In this study, students pictured a sound suitable for the scene in the story. They then expressed the sound using piano, many kinds of percussion instruments with the addition of personal items (not necessary musical).

The study of sound effects gave the students the opportunity to discover the following.

1. Different sounds from one instrument.
2. The various elements of music such as tone color, high and low, long and short, tempo, rhythm pattern, harmony etc.

Key words : sound effect 効果音  
teaching material 教材  
image イメージ  
expression 表現

## I. はじめに

マリー・シェーファーが提案したサウンドスケープ<sup>1)</sup>や山本文茂が物語と音楽の融合に着目して提案した創造的音楽学習など、我が国の小学校音楽科の授業において創造的音楽活動の実践が試みられるようになって久しい。保育現場においても、音のイメージをもとに言語表現活動や造形表現活動、あるいは身体表現活動へと展開させるような様々な実践が行われている<sup>2)~4)</sup>。また、保育士や幼稚園教諭、あるいは小学校教諭の養成校の学生を対象に取り組んだ創造的音楽活動に関する実践も報告されている<sup>5)~6)</sup>。筆者も養成校の学生を対象に身の回りにある音、すなわち楽音 (tone) に限らず、それ以外の音 (sound) をも意識的に聴取する活動や、採取した音のイメージをもとに図形楽譜づくりや、その演奏等といった創造的音楽活動に関する実践研究を行っている<sup>7)~9)</sup>。

小池 (2000) の指摘にもあるように、一般的に養成校に入学してくる学生たちの音楽学習経験は浅い傾向がある<sup>10)</sup>。本学の場合も同様の現状を抱えており、入学者の中には高等学校において音楽科授業を履修しなかった者やピアノのレッスン等の音楽経験を全く持たない学生も多数含まれている。そのため、特に入学当初には読譜への戸惑いや演奏技術の未熟さなどから、自分の音楽的力量に対する不安、思うように表現できないもどかしさを痛感する学生も多い。このように音楽に対して苦手意識を持っている学生たちは、とにかく自分自身の演奏技術習得へと目が向きやすい傾向がある。

将来、保育現場や小学校の音楽での諸活動を通して子どもたちと関わるには、子どもの表現を読み取り、そこからさらに豊かな表現を引き出していくような実践力が求められる。したがって学生時代にピアノ等の演奏が上手にできるようになりさえすれば、保育現場や小学校での活動が充実したものとなるとは限らない。養成校在学中に「子どもたちに何を伝えるのか」「音楽の何を教えるのか」といった視点を持って音楽の諸活動に取り組むことができるような保育者、教師に求められる音楽的力量を十分に培っておくことが肝要であろう。

マーセルは著書の中で、「音楽的成長とは、音楽という芸術の本質と表現の両面によりよく反応できるようになることであり、それがまた私たちが音楽的になる過程である。…人は単なる技術の習得によって音楽的になるのではなく、音楽とリズムによ

るデザインとしての音楽を知覚し、創造し、思考し、かつ音楽の実体に感情的に反応し得る力の発達によって音楽的になるのである」と述べている<sup>11)</sup>。この記述は養成校における音楽教育の在り方を考える際に、多くの示唆を与えてくれる。

我々の身の回りには、実に多種多様な音が存在している。はたしてどれほどの学生が刻一刻と変化している音の存在に気づき、意識的に耳を澄ましてこれらの音を聴きとり、その音のイメージを思い描く体験を持っているのだろうか。音楽鑑賞の時間に限らず、自らが演奏する際にも音を傾聴し、イメージを描くことは欠かせない。そのような意味においても、「聴く」ということは全ての音楽活動の基盤であると言える。

本実践では本学の学生たちに対して、紙芝居の効果音づくりに取り組むことを通して、表現したいと思う音のイメージを描き、そのイメージをピアノや打楽器、身の回りの物などを活用して様々な音を創り出し表現することを求めた。本稿では音を創造する活動の意義について、この実践の記録と学生の記述内容をもとに考察を試みる。

## II. 実践の概要

### 1. 対象

平成22年度本学子ども学部子ども学科2年次受講生53名及び平成23年度本学子ども学部子ども学科2年次受講生62名、計115名。

### 2. 時期

各年度とも10月中に90分授業4回を使って実施した。

### 3. 科目

保育内容指導法 (表現)。保育士、幼稚園教諭だけでなく、小学校教諭を目指す学生たちも受講している。

### 4. 場所

本学、音楽室

### 5. 活動内容

各回の授業中の活動内容は下記の通りである。

#### 1回目：紙芝居の選択と読み合わせ

1グループ4~5名程度の人数に分かれ、本学図書館にて紙芝居1編を選択する。紙芝居を音楽室へ持ち帰り、朗読担当を交代しながら読み合わせを行う。効果音を入れる箇所と音のイメージを描き、そ

れを表す擬態語、擬声語、形容詞等の語句を付箋紙に記入し、該当する箇所に貼る。

#### 2回目：効果音づくり

筆者がピアノを演奏しグリッサンド、クラスター、ペダルの活用等に関する説明を行った。また、使用する楽器については個々の楽器本来の奏法に拘らずに音を出すことを試みるように助言した後、ピアノ、その他の楽器や身の回りの物を使って効果音を創る活動に取り組む。

#### 3回目：発表に向けての練習

音を入れるタイミングを考慮しながら、朗読に合わせて効果音を入れていく。また、自分たちのイメージ通りの音になっているか否かを検討し、必要に応じて音の修正作業に取り組む。

#### 4回目：紙芝居のグループ発表およびアンケート調査の実施

紙芝居上演の様子は、学生の理解を得たうえでビデオ撮影を行った。全グループの紙芝居の発表終了後、アンケート調査を実施し、この活動に取り組んだ体験を通しての各自の気づきと感想についての記述を求めた。約20分間の記述時間を与え、授業終了時に回収した。(回収率100%)

1編ずつこの課題で使用する紙芝居を自由に選択させた。各グループとも読み合わせを行いながら、紙芝居の選択を行っていた。その際、学生たちからは、「この紙芝居は音が付けにくい」「これは色々な音が上手く出来そうな紙芝居だ」といった発言が頻繁に聞かれたことから、後日実施するアンケート調査項目の中に、効果音づくりに活用する紙芝居の選択理由に関する項目を加えた。この結果に関しては、後述するアンケートの集計結果の箇所で報告する。平成22年度及び23年度の学生が選択した紙芝居は表1と表2の通りである。この2年間に重複して選択された紙芝居は無かった。

## 2. 効果音づくりについて

学生たちは自分たちが選択した紙芝居を音楽室へ持ち帰り、グループ毎に効果音づくりの課題に取り組んだ。効果音づくりは下記の作業順を参考にしよう学生たちに伝えた上で取り組ませた。

- ①既存の曲は使用しない。
- ②紙芝居の読み合わせを行いながら効果音を入れる箇所を抽出し、該当箇所に付箋紙を貼る。
- ③効果音のイメージを擬態語、擬声語、形容詞などに言語化し、付箋紙に記入する。
- ④使用しようと思う楽器や活用する身の回りの物をリストアップし、付箋紙に記入する。
- ⑤④で予想した楽器や物を使って実際に音を出しながら、使用する楽器や身の回りの物を選択する。楽器を使う場合には、本来の奏法に拘らずに鳴らし方を工夫する。

## Ⅲ. 結 果

### 1. 紙芝居の選択について

学生全員を本学図書館へ移動させ、グループ毎に

各グループの学生たちが効果音づくりに使用した楽器と身の回りの物は、表3と表4の通りである。

表1 平成22年度使用紙芝居一覧

| タイトル           | 作者(文)   | 作者(画)   | 出版社   |
|----------------|---------|---------|-------|
| あおむしだれのこ       | 与 田 準 一 | 武 智 みつえ | 童 心 社 |
| ありのぼうけん        | 堀 尾 青 史 | 宮 下 森   | 童 心 社 |
| おむすびころりん       | 柴 野 民 三 | 安 井 康 二 | 教育画劇  |
| おたまじゃくしの101ちゃん | か こ さとし | 仲 川 道 子 | 童 心 社 |
| てるてるてんきになあれ    | 岡 信 子   | 西 村 達 馬 | 教育画劇  |
| ねずみきょう         | 武士田 忠   | 渡 辺 有 一 | 童 心 社 |
| ふるやのもり         | 水 谷 章 三 | 金 沢 佑 光 | 童 心 社 |
| あわてんぼうウサギ      | インド民話   | 中 沢 正 人 | 教育画劇  |
| ゲンさんのてんのぼり     | 菊 池 俊   | 塩 田 守 男 | 教育画劇  |
| だんごむしのころちゃん    | 高 家 博 成 | 仲 川 道 子 | 童 心 社 |
| まぼうのこなぐすり      | 小 野 和 子 | 西 村 郁 雄 | 教育画劇  |

**表2 平成23年度使用紙芝居一覧**

| タイトル           | 作者（文）     | 作者（画）   | 出版社    |
|----------------|-----------|---------|--------|
| アンパンマンとぼんぼん島   | やなせ たかし   | やなせ たかし | フレーベル館 |
| 一休さんのとらたいじ     | 監修：森やすじ   | 坂 巻 貞 彦 | 教育画劇   |
| いなむらの火         | 川 崎 大 治   | 降 矢 洋 子 | 童 心 社  |
| うんどうかいってたのしいな  | いしばししずこ   | 石 橋 三 宣 | 教育画劇   |
| おおかみと7匹のこやぎ    | グ リ ム 童 話 | 加 藤 晃   | 教育画劇   |
| おだんごころころ       | 坪 田 譲 治   | 二 俣 英五郎 | 童 心 社  |
| きんたろう          | 監修：森やすじ   | 才 田 俊 次 | 教育画劇   |
| ごきげんのわるいコックさん  | まつい のりこ   | まつい のりこ | 童 心 社  |
| さるかにがっせん       | 伊 藤 海 彦   | 黒 井 健   | メ イ ト  |
| 三びきのこぶた        | イギリス民話    | 福 田 岩 緒 | 童 心 社  |
| たべものランドのおまつりだ！ | 宗 方 あゆむ   | 毛 利 将 範 | 教育画劇   |
| のっぺらぼう         | 渋 谷 勲     | 小 沢 良 吉 | 童 心 社  |
| はなたれこぞうさま      | 安 田 浩     | 若 菜 珪   | 教育画劇   |
| はぶらしシュシュシュッ    | 力 夕 倫     | 力 夕 倫   | 教育画劇   |

**表3 平成22年度効果音つくりのための使用物一覧**

| タイトル           | 楽器・身の回りの物                                                                    |
|----------------|------------------------------------------------------------------------------|
| あおむしだれのこ       | ピアノ、グロッケンシュピール、ウッドブロック、木琴、マリンバ、カスタネット、バスドラム、鈴、シンバル、ラトルスティック、段ボール箱、新聞紙        |
| ありのぼうけん        | ピアノ、ウッドブロック、バーチャイム、シンバル、クリケット、カスタネット、トライアングル、バスドラム、木琴、ティッシュの空き箱、机            |
| おむすびころりん       | ピアノ、ウッドブロック、カウベル、クリケット、木琴、ボンゴ、柄付きカスタネット                                      |
| おたまじゃくしの101ちゃん | ピアノ、オーシャンドラム、レインスティック、ビブラフォーン、木琴、クリケット、タンバリン、ジャンベ、笹の枝、紙袋、ポリ袋、新聞紙             |
| てるてるてんきになあれ    | ピアノ、レインスティック、トライアングル、バスドラム、スネアドラム、シンバル、木琴、木魚、バーチャイム、カスタネット、音楽室のカーテンを勢いよく開閉する |
| ねずみきょう         | ピアノ、木魚、トライアングル、バスドラム、スネアドラム、木琴、音楽室のドア                                        |
| ふるやのもり         | ピアノ、ウッドブロック、バスドラム、レインスティック、ラトルスティック、ハンドドラム、空き箱、空き缶、段ボール箱                     |
| あわてんぼうウサギ      | ピアノ、クリケット、バスドラム、ハンドドラム、アゴゴドラム、タンバリン、鈴、柄付きカスタネット、足音、机                         |
| ゲンさんのてんのぼり     | ピアノ、オーシャンドラム、ハイハットシンバル、木琴、スネアドラム、ビブラスラップ、マラカス、ラトルスティック、水入りバケツ、足音             |
| だんごむしのころちゃん    | ピアノ、カスタネット、バスドラム、ハンドドラム、ジャンベ、カバサ、柄付きカスタネット、木琴、新聞紙、雑誌                         |
| まほうのこなぐすり      | ピアノ、リコーダー、スネアドラム、クリケット、ボンゴ、コンガ、鈴、神楽鈴、ウッドブロック、うちわ2枚                           |

**表4 平成23年度効果音づくりのための使用物一覧**

| タイトル           | 楽器・身の回りの物                                                                      |
|----------------|--------------------------------------------------------------------------------|
| アンパンマンとぼんぼん島   | ピアノ、ボンゴ、オーシャンドラム、バスドラム、タンバリン、神楽鈴、机                                             |
| 一休さんのとらたいじ     | ピアノ、トライアングル、ビブラスラップ、木魚、バーチャイム、                                                 |
| いなむらの火         | ピアノ、オーシャンドラム、バスドラム、足音                                                          |
| うんどうかいったのしいな   | ピアノ、木魚、木琴、スネアドラム、ホイッスル、卒業証書入れの筒、口笛                                             |
| おおかみと7匹のこやぎ    | ピアノ、ウッドブロック、ビブラスラップ、鈴、ボンゴ                                                      |
| おだんごころころ       | ピアノ、木琴、バーチャイム、フロアタム、ウッドブロック、ボンゴ、コンガ、神楽鈴、バスドラム、木魚、ビブラスラップ、足音                    |
| きんたろう          | ピアノ、オーシャンドラム、バスドラム、ボンゴ、ビブラスラップ、ハイハットシンバル、アゴゴベル、クラベス、バーチャイム、トライアングル、ウッドブロック、ポリ袋 |
| ごきげんのわるいコックさん  | ピアノ、タンバリン、木琴、ベル、カリンバ、木魚、オーシャンドラム、メトロノーム                                        |
| さるかにがっせん       | ピアノ、カリンバ、木魚、ラトルスティック、バスドラム、ウッドブロック、アゴゴベル、グロックンシュピール、ティッシュの空き箱に輪ゴムを張った物         |
| 三びきのこぶた        | ピアノ、ジャンベ、シンバル、クラベス、バスドラム、鈴、カスタネット、スネアドラム、鍋のふた、新聞紙、水入りペットボトル、風船、石2個、紙袋          |
| たべものランドのおまつりだ！ | ピアノ、バーチャイム、トライアングル、バスドラム、木琴、タンバリン、クリケット、ギロ、スネアドラム、新聞紙                          |
| のっぺらぼう         | ピアノ、ビブラフォーン、トライアングル、木魚、音楽室の電灯のスイッチ、音楽室のドア                                      |
| はなたれこぞうさま      | ピアノ、リコーダー、バーチャイム、タンバリン、ウッドブロック、オーシャンドラム、ラトルスティック、木魚、マリンバ、シンバル、鈴                |
| はぶらしシュシュシュ     | ピアノ、タンバリン、バーチャイム、カリンバ、オーシャンドラム、カバサ、マリンバ、木琴、机                                   |

### 3. アンケート調査について

学生たちに効果音づくりの取り組みを振り返らせる目的で、下記の3項目のアンケート調査を実施した。各項目とも選択肢は与えず、全て自由記述とした。

なお、Q2とQ3の結果については、学生の記述を引用する。両年度とも、同じ内容の記述が複数の学生から得られたが、今回は年度別の記述内容の比較検討は行わず、記述者数のみの報告にとどめる。文末の（ ）内の数字は、同様の内容を記述した平成22年度と平成23年度の合計人数を示す。

#### Q1 効果音づくりの課題で活用する紙芝居を選択する際に、あなたが重視した点は何でしたか。

各グループで使用する紙芝居は、まず、個々の学生が選択したものを持ち寄り、それぞれのグループのメンバー同士で相談のうえ最終的に一編に絞って

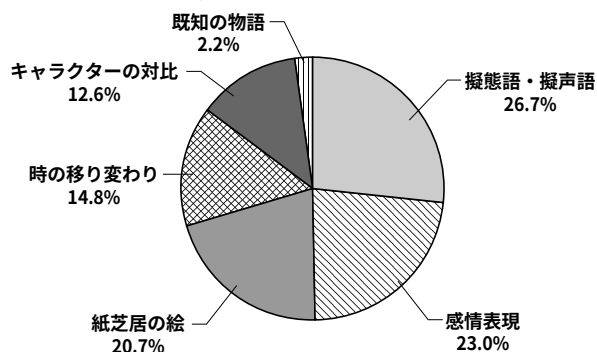
いた。この調査項目は、本学図書館に所蔵されている多くの紙芝居の中から一編の紙芝居を選択する過程で、どのような点を考慮しながら取捨選択をしたのかを知る目的で設定した。Q1では語群を与えなかったが、学生たちには選択理由をなるべく具体的に回答するよう求めた。学生の記述内容を整理したところ、紙芝居の選択理由は下記の6点に集約することができた。

- ①物語に擬態語や擬声語が含まれている。
- ②登場人物や登場物（動物・虫）の感情の変化が描写されている。
- ③登場人物や登場物（動物・虫）に個性的なキャラクターの対比が見られる。
- ④冬から春、朝から夜といった季節や時間の移り変わりが描かれており、場面の変化が捉えやすい。
- ⑤既知の物語である。
- ⑥紙芝居に描かれている絵の中に、音の存在が感じ

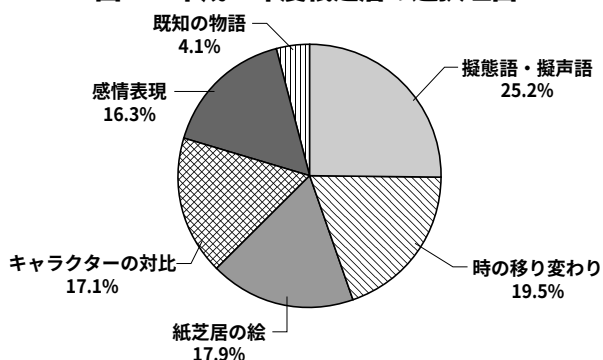
られる。

下記の図1と図2は、Q1の集計結果を年度別に示したものである。

**図1 平成22年度紙芝居の選択理由**



**図2 平成23年度紙芝居の選択理由**



平成22年度の学生が、効果音を付ける課題に取り組む際に活用する紙芝居の選択理由で最も多かったのは「物語に擬態語や擬声語が含まれている」で、次いで「登場人物や登場物（動物・虫）の感情の変化が描写されている」「紙芝居に描かれている絵の中に音の存在が感じられる」「季節や時間の移り変わりが描かれている」「登場人物や登場物（動物・虫）に個性的なキャラクターの対比が見られる」「既知の物語である」という結果であった。平成22年度、23年度ともに最も多くの学生が挙げた選択理由は「物語に擬態語や擬声語が含まれている」で、逆に最も少なかったのは「既知の物語である」という理由であった。また、「紙芝居に描かれている絵の中に音の存在が感じられる」という選択理由は、両年度とも3番目に多い理由として挙げられていた。

## Q2 効果音づくりの活動を通して、あなたが気づいたことは何ですか。

学生の記述内容を整理した結果、1. 打楽器に関する気づき、2. ピアノに関する気づき、3. 即興

演奏に関する気づき、4. その他の4項目に分類することができた。ここでは学生の記述を引用し報告する。なお、学生の記述には、文言の表現の違いはあっても近似した内容の記述が多数見られたため、本稿では、そのような学生数を合計し文末の（ ）内に記した。

### 1. 打楽器に関する記述

- ・それぞれの打楽器の奏法に拘らずに鳴らしてみると、想像していた音とは全く異なる音が出た。(15)
- ・鳴らし方を工夫することによって、一つの打楽器から多くの種類の音を創り出すことができた。(13)
- ・音の強さ、高さ、長さ等を変えながら、自分たちがイメージした音を探していった。(11)
- ・「この楽器はこういう音（柔らかい、かたい、力強い等）が出る」というように、自分の中でそれぞれの楽器の音のイメージを決めつけて捉えていたということに気づいた。(10)
- ・シンバルや大太鼓は力強い音が出る楽器だが、鳴らし方によっては柔らかい音も出せる。(6)
- ・(カリンバ、クリケット、ジャンベ等) これまで鳴らしたことのない楽器にも触れることができた。(6)
- ・子どもたちにとっても、楽しめる活動だと思った。(5)
- ・鳴らし方を変化させると、音色もどんどん変化していった。(2)
- ・使用するバチを変える（バチの持ち手の方で鳴らす等、バチの使い方を変える）だけで、全く別の音を出すことができた。
- ・鳴らし方を変えたり、楽器の組み合わせを変えたりなど、この活動を通して、微かな音色の違いを感じ取るということを体験した。音の種類は無限に存在するということに気づくことができた。
- ・効果音を創っている時、自分が出した音に対して、ハッとする瞬間があった。この活動では、思いがけない音との出会いを体験することができた。

### 2. ピアノに関する記述

- ・ピアノを指ではなく手のひら、こぶし、腕を使って弾いたのは、今回が初めての経験だった。

- (23)
- ・ピアノは弱い音と強い音の違いを、はっきりと表現できる楽器だと思った。(20)
  - ・グリッサンドを弾いたのは、今回が初めてだった。(20)
  - ・ピアノを弾く楽しさを味わった。(19)
  - ・不安感、恐怖感を表現する時に使う音は、手のひらやこぶしを使って和音を弾いた。(11)
  - ・ピアノのグリッサンドでは、弾く音域によって雰囲気が変わってくるということが分かった。(17)
  - ・色々な高さで弾いてどのような音になるのかを試し、それを聴き比べながら効果音をつくった。(13)
  - ・ピアノは初心者なので、普段、曲を弾く時は中央あたりの鍵盤しか使ったことがなかったが、この授業で初めて隅々の鍵盤まで使って弾いた。(5)
  - ・ペダルの踏み方を変えていくと、それにつれて音色も変化していった。(4)
  - ・ピアノは高音から低音までの音の広がりがあり、とても大きい楽器だと思った。(4)
  - ・高さ、強さ、長さを変えて弾いたら、雰囲気もそれぞれ変わっていった。(3)
  - ・色々な音域で、手のひら等を使って色々な音を重ねて和音を弾いてみると、子どもの歌の簡易伴奏の時に使う和音とは違った雰囲気を感じた。(2)
  - ・グリッサンドでは、同じ音域であっても黒鍵だけ、白鍵だけ、黒鍵と白鍵の両方を使って弾いてみた。それぞれに違う雰囲気が表現できて面白かった。(2)
  - ・音を長くのばしたりスタッカートしたり等、音の長さを変えて弾くと、同じメロディーも違った感じになる。
  - ・人ごみの雑踏、恐怖を感じながら疾走する様子、うねるような波の音など、ピアノ1台だけで色々な情景を表現できることに驚いた。
  - ・初心者なので、この授業を受けるまでは、ピアノのペダルを使ったことがなかった。ペダルを工夫しながら使ってみるという発想自体がなかった。
  - ・ピアノは静けさ、柔らかい雰囲気、不安感、騒々しさなど、一つの楽器で色々な雰囲気を表現することができる楽器だと思った。

- ・ピアノの曲を弾くのは苦手だが、この授業ではピアノを弾くことが苦にはならなかったし、むしろ楽しめた。
- ・ピアノは打楽器のような使い方もできる楽器だと思った。
- ・子どものころからピアノを習ってきたので、色々なピアノ曲を弾いたことはあるが、効果音づくりをしたのは初めてだった。効果音をつくっていく時には、同じグループのメンバー同士、交代しながらピアノを弾いてみた。初心者の人も伸び伸びとピアノを弾いていたのが印象的だった。
- ・4小節程度、思いつきで弾いてみた。調を変えて弾いたら、雰囲気が違って聞こえた。普段は楽譜を見て弾いているだけで、調の違いを考えたことは無かった。効果音づくりは調の違いに目を向けるきっかけになった。
- ・自分はとてもピアノが苦手なので、普段は楽譜を見ながらやっとの思いで弾いている。効果音づくりの活動では楽譜を使わなかったので、自分の音を聴き取ることに集中することができた。

### 3. 即興演奏に関する記述

- ・音を出す時は、朗読担当の人と一緒に楽器を鳴らす人たちと目で合図を出し合ってタイミングをつかんだ。(12)
- ・楽譜を使わないで演奏するというのは、今回が初めての経験だった。(11)
- ・即興で演奏するのは、自分には出来そうにはないと思っていたが、実際にやってみると予想以上に楽しかった。(6)
- ・即興で弾いている時は、いつもよりも集中して音を聴いていたと思う。(3)
- ・色々な楽器を自由に鳴らして、音と戯れた。
- ・楽譜に縛られない面白さ、楽しさを味わった。
- ・リズムパターンと音域だけを決めて、ピアノを打楽器みたいに即興で弾いてみた。とても楽しかった。
- ・木琴、マリンバ、ビブラフォーンを友だちと一緒に即興で弾いた。音のコントラストを即興で組み立てていくことは、とても面白かった。

### 4. その他の記述

- ・イメージ通りの音を創り出すのは、とても難しかった。(16)

- ・友だちと一緒に色々な音を聴き比べ、皆で意見を出し合いながら効果音をつくった。皆で音の出し方を工夫していくのは、楽しかった。(13)
- ・身の回りの物にあるもので、どのような音が出せるのかが気になるようになった。(8)
- ・自分が気づいていなかったことを、友だちの意見を聞くことで知ることができた。(7)
- ・この活動を通して、テレビドラマや映画でどのような効果音が使われているのかということに関心を持つようになった。(6)
- ・楽器だけでなく、身近な物を上手く活かすことによって、様々な音を創り出すことができた。(5)
- ・普段、何気なく聞き流してしまっている音の存在に注意を向けるようになった。(4)
- ・この活動では、随分と色々な音を注意深く聴き比べたという思いが強く残っている。
- ・効果音をつくるためには、その場面で出したい音のイメージを自分の中でしっかりと描いておくことが大切だと思った。
- ・「静寂」を表現する時にも音を使うと、その雰囲気表現をすることができるということが分かった。
- ・一つの楽器で表現しようとする場面と、いくつかの音を重ねてみようと思う場面とがあった。静かな場面だから一つの音で表現し、賑やかな場面だから音を重ねるといった単純な理由で音を重ねるかどうかを決めることはできなかった。
- ・「嬉しい」とか「驚いた」といった登場人物の感情は、音としては存在しないが、効果音づくりでは、それも表現の対象になっていた。
- ・感情を表現する音をつくるのは難しかったが、その音を加えるとその場面の臨場感がぐっと増した。
- ・表現したい音がすぐにできる時もあったが、どのような効果音を入れると春らしい雰囲気が出せるのか、または冬らしい雰囲気に変化するのかなど、季節感を音で表現するための音を創り出すことが特に難しかった。
- ・身の回りには多くの音が溢れているということは当たり前すぎていて、特に気にかけることもなかった。今回の活動を通して、自分は音に気をとめることもせずに、いつも聞き流してしまっていたということに気づいた。
- ・この活動を通して、音を聴くことの大切さを学

んだ。

- ・音と音の間の取り方を変えると、雰囲気も違ってくる。
- ・効果音づくりでは、全身で音をきいていたような気がする。
- ・楽譜通りに演奏する時には自分に弾けるかどうかといった技術的な点を気にしてしまうが、効果音づくりのように音を創り出す活動では、ピアノに対していつものような苦手意識を感じることはなかった。

### Q3 他のグループの発表を見て、あなたが気づいたことは何ですか。

- ・朗読する人と効果音を入れる人とが、目配せをしながら音を入れるタイミングを伝え合っていた。(26)
- ・朗読を担当した人は、早口で読んだり、ゆっくり読んだり、間を開けたりといった工夫をしていた。(24)
- ・登場人物に合わせて声色や声の大きさを変えており、声の使い方を工夫していた。(22)
- ・朗読の声が小さいと、聴いている側は物足りなさを感じた。よく通る声で読むことが大切だと思った。(15)
- ・恥ずかしがらずに演じることが大切だと思った。(12)
- ・身の回りにある物を使って、上手く効果音をつくっていたと思う。(10)
- ・紙芝居を読む人の声と効果音のボリュームを整えると、臨場感のある紙芝居になる。(6)
- ・登場人物になりきって感情を込めながら読み方を変えると、物語がよりリアルになる。(2)
- ・時々、朗読も効果音も入れないような間を取ると、紙芝居に味が出る。(2)
- ・演じる側が「表現したい」という思いをしっかりと持って、紙芝居を読んだり、効果音の演奏をすることが大切なのだと思った。そのような演じる側の思いが、見ている側にも伝わっていくのだと思った。
- ・紙芝居全体を通して、しっかりと練習を重ねることができたグループはやはり見ごたえがあった。自分たちの成果を十分に表現するためには、部分的な打ち合わせだけでなく、紙芝居全体を通して皆が演じることができるよう、十分に練習をしておくことが大切だと思った。



## Ⅳ．考 察

本研究における「紙芝居の効果音づくり」の音楽活動には、下記の3つの柱がある。

- ①紙芝居に描かれている物語や絵をもとに、音のイメージを描く。
- ②マリー・シェーファーによって提案されたサウンドスケープのように、楽音に限らず様々な身の回りの音にも意識を向け、あらゆる音を再認識する。
- ③紙芝居における言語と絵画と効果音とを融合させる。

音のイメージを描く活動において学生たちは、単に紙芝居の物語の中に書かれている擬態語や擬声語を音に変換するだけでなく、紙芝居に描かれている絵から連想される音も効果音の表現対象として捉えていた。また、紙芝居のストーリーに描かれている季節の移り変わり、あるいは夜から朝へといった時間の経過を表現するためにも効果音を挿入していたが、その際には紙芝居に描かれている絵から連想できる音、例えば鳥のさえずりや柔らかな日差し等を描くことを試みていた。このように紙芝居の効果音づくりにおいて学生たちは、紙芝居の物語だけでなく、そこに描かれている絵からも音のイメージを紡ぎだしていたと言える。

活動後に実施したアンケートの記述には、登場人物や登場物の「感情」も効果音の表現対象として捉えていたことが述べられていた。喜怒哀楽といった「感情」そのものには、音が存在しているわけではない。しかし紙芝居の効果音としては、感情描写も重要な表現対象として位置づけられていた。実際には存在しない音をあえて挿入することによって、学生たちは紙芝居の臨場感を増す効果を図ったものと考えられる。実在する音を表現するだけでなく、実在しない音も含めて効果音の表現対象となっていた。

人混みの雑踏や虫が群れをなしているような様々な音が混在しているような賑やかな場面では、複数の楽器や身の回りの物を使って音を重ね合わせていたが、その一方で「静寂」を表現する際にも効果音を挿入していた。感情描写同様、ここでも実在しない音を楽器や身の回りの物を用いて音を創り出し、効果音として挿入していたという点は興味深い。

第1回目の授業の時に学生たちは、効果音のイメージを付箋紙に記入し、効果音を挿入する紙芝居の該当箇所添付していた。それらの付箋紙には比較的、言葉へ置き換えやすい擬態語や擬声語に加え、

「心地よい音」「すがすがしい音」「不気味な音」「ジーンと胸に迫るような音」といった、自分たちが表現したいと思っている音に対する印象も付記していた。このように学生たちは、音のイメージを言語化することによって、音への意味付けを行っていた。

「イメージ」「効果音」「表現」といったこれら3項目は、イメージから効果音へ、効果音から表現へと一方向へ進んでいくものではない。イメージが言葉や音で表現されることによって、さらに新たなイメージが描かれることもあるし、効果音を表現することによって得た気づきから、さらに新たな音のイメージを描くことへと繋がっていく。学生たちは相互に意見を出し合いながら、使用する楽器を選択し、奏法を工夫しながら自分たちがイメージした効果音を創り出すための試行錯誤を繰り返していた。「イメージ」と「効果音」と「表現」は、相互に絡み合っている。

マリー・シェーファーによって提案されたサウンドスケープでは、日常の生活体験の中で発生する様々な生活音、鳥のさえずりや動物の鳴き声や風雨の音などの自然音、人工的な機能音、人混みのような社会的な環境音などの特徴を捉えていく。効果音づくりの過程において学生たちは、身の回りの音にも意識を向け、言語化し、再認識することにも取り組んでいた。アンケートの記述の中に、「普段、何気なく聞き流してしまっている音の存在に注意を向けるようになった」「身の回りには多くの音が溢れているということは当たり前すぎていて、特に気にかけることもなかった。今回の活動を通して、自分は音に気をとめることもせずに、いつも聞き流してしまっていたということに気づいた」という記述があった。学生たちにとって紙芝居の効果音づくりの活動は、普段あまり気にとめることのない身の回りの音に対しての意識化を図ることができる体験的学習の場であったと言える。

また、学生の記述をみると、彼らは効果音をつくる過程で「強弱」「長短」「高低」「音色」「音域」「調性」「リズムパターン」といった音楽の要素に着目していたということが分かる。効果音づくりの活動では、音のイメージを描き、鳴らし方を工夫し、それによって変化していく音を聴き比べることが求められる。そうすることによって学生たちは音楽の諸要素に目を向けるようになり、結果的には音楽の諸要素の学習にも取り組んでいたことになる。換言す

れば「紙芝居の効果音づくり」は、音楽の諸要素の学習教材として有用であると言える。

今村は、「楽器を鳴らすこと、モノとかかわって音を出すこと、音楽を聞くこと、身の回りの音を聞くことはこれまで区別して考えられる傾向があった」と指摘している<sup>12)</sup>。将来、子どもと関わる職種に就くことを目指して学習している養成校の学生たちが、音楽活動での実体験を通して、この接点を繋ぐ視点を培っておくことは極めて重要である。養成校における音楽の諸活動の中に、「楽器」「物」「音・音楽」「身の回りの音を聴く」ことを包括するような学習教材を組み入れることが求められよう。学生たちの体験後の記述内容をみると、効果音づくりの教材は、そのための学習教材となり得ると言える。

効果音づくりでは、「クラスター」「グリッサンド」「ペダルの活用」「即興演奏」等、ピアノの活用に関する気づきが多数得られた。本学の学生たちの多くはピアノ未経験のまま入学しており、彼らの多くはピアノに対する苦手意識を持っている。ピアノレッスンの授業だけでは、なかなか彼らの苦手意識を払拭することは難しい。効果音づくりの活動では、未経験者として入学してきた学生たちも、ピアノの演奏に取り組んでいた。「ピアノの曲を弾くのは苦手だが、この授業ではピアノを弾くことが苦にならなかったし、むしろ楽しめた。」「自分はとてもピアノが苦手なので、普段は楽譜を見ながらやっとの思いで弾いている。効果音づくりの活動では楽譜を使わなかったの、自分の音を聴き取ることに集中することができた。」「ピアノは初心者なので、普段、曲を弾く時は中央あたりの鍵盤しか使ったことがなかったが、この授業で初めて隅々の鍵盤まで使って弾いてみた。」「初心者なので、この授業を受けるまでは、ピアノのペダルを使ったことが無かった。ペダルを工夫しながら使ってみるという発想自体が無かった。」というのは、いずれも未経験で入学してきた学生たちの記述である。これらの記述をみると、読譜力が脆弱なために普段は楽譜に気を取られ、自分が弾いている音を聴き取る余裕もないまま、懸命に指を動かしてピアノを弾いている様子が伝わってくる。彼らは効果音づくりの課題に取り組む中で、ピアノという楽器の特性を知るための貴重な体験をしていたということになる。効果音づくりは、ピアノレッスンの授業の中では体験することができない、ピアノ学習の場であったとも言えよう。

## V. まとめ

この実践では、学生たちに対して様々な楽器や身の回りの物を使って紙芝居の効果音を創ることを課した。学生たちの作品発表やアンケートの記述内容をもとにその成果を検討した結果、「紙芝居の効果音づくり」の教材は、学生たちにとって以下のような体験学習の場であった。

1. 音のイメージを描きそれを表現するための試行錯誤を重ねることを通して、学生たちはおのずと音を傾聴するようになり、聴くことの重要性を実感していた。音の傾聴は、様々な楽器の特性を理解することにも繋がっていた。
2. 音を傾聴する体験を通して学生たちは音楽の諸要素に着目するようになり、「長さ」「高さ」「リズムパターン」等の音楽の諸要素を変化させることによって、新たな音を生み出すことができるということへの理解を深めていた。
3. 保育者、教師に求められる「楽器を鳴らすこと」「物とかかわって音を出すこと」「身の回りの音を聴くこと」「音のイメージを描き、それを音で表現すること」「音・音楽を注意深く聴き取ること」とを繋ぐ視点を培うための体験ができる場であった。

本研究における学生たちの演奏は、全て即興で演奏しており、既存の曲は用いなかった。今後の課題は、学生たちの演奏の楽譜を採譜し、より詳細な分析を試みることにある。

## 註

- 1) R. マリー・シェーファーは音の環境をサウンドスケープと呼んだ。これは視覚的な風景を意味するランドスケープ (landscape) とサウンド (sound) を合成した語であり、提案者であるマリー・シェーファーが考え出した造語である。マリー・シェーファーは『サウンド・エデュケーション』(鳥越けい子他訳 春秋社 1992) において、「我々がどこにしようと、その音の場の全てがサウンドスケープであり、ランドスケープのように野外にのみ限定されることはない。サウンドスケープは一日の時刻によっても季節によっても違われ、場所やその国の文化によっても異なる」と述べている。

- 2) 筆者は共同研究者とともに、4小節から8小節程度の身体表現教材曲を用いて、幼稚園において4歳児を対象に実践研究に取り組んだ。曲のイメージをもとに言語表現、絵画表現、造形表現へと展開していった表現活動の実践を下記の論文にまとめている。米倉慶子、櫻井琴音 イメージより展開する幼児の表現活動ー身体表現教材を用いてー 全国大学音楽教育学会研究紀要第5号 1994
- 3) 筆者は幼稚園の年長児を対象に、歌唱活動から展開する表現活動についての実践研究に取り組んだ。歌唱後、曲のイメージをもとに子どもたちは劇遊びへと展開していった。この実践経過と結果を下記の論文において報告している。櫻井琴音 幼児曲より展開する幼児の表現活動 日本保育学会第48回大会論文集 1995
- 4) 小杉裕子 音・音楽とかかわり遊ぶ幼児の表現とその指導ー音のイメージを表現する活動の実践からー 愛知教育大学幼児教育研究第13号 2007
- 5) たとえば保育者養成課程の養成校の学生を対象にした実践研究としては、ここ10年間の間に全国大学音楽教育学会研究紀要にも下記の論文が掲載されている。  
高橋一行 「音と視覚イメージの関連についてー楽器の音によるイメージ画を通してー」 第12号 2001  
上谷裕子 「創造的音楽活動の試みー音のイメージからの展開ー」 第15号 2004  
駒久美子 「保育者養成における音楽的な自己表現と構造的聴取の重要性ー授業における創造的な音楽活動の観察と分析を通してー」 第18号 2007
- 6) 同上の全国大学音楽教育学会研究紀要に、小学校教員養成課程の実践としては下記の論文が掲載されている。  
佐野仁美 「小学校教員養成課程における創造性を高める指導の試み」 第18号 2007
- 7) 櫻井琴音 「音の視覚イメージを用いた音楽表現活動の実践」 永原学園佐賀短期大学紀要 第38巻 2008
- 8) 櫻井琴音 即興演奏における非言語的交流に関するー考察 永原学園佐賀短期大学紀要 第38巻 2008
- 9) 櫻井琴音、二宮貴之 「音の特徴を捉えるための音楽活動ー音の傾聴と視覚のイメージー」 西九州大学子ども学部紀要第1巻 2010
- 10) 小池美知子 「保育者養成における想像的音楽活動のー考察ー授業実践を通してー」 全国大学音楽教育学会 第11号 2000
- 11) ジェームス・L・マーセル 「音楽的成長のための教育」 美田節子訳 音楽之友社 1971
- 12) 今村方子 保育者養成の新たな視点ーある音楽作品創作のための保育実践を通してー 音楽教育実践ジャーナル vol.1 No.2 日本音楽教育学会 2004